九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所　　属：　　人文学科

名　　前：　　河田　将一

作成日：2026 年 8 月 25 日
教員氏名：河田　将一
所属：人文学部　人文学科　児童教育専攻

1．はじめに

昨今、大学の教育については単位の実質化や教育の質の保障と教育成果の公表など、自らの教育に対するさらなる責任や外部に向けての説明が求められている。大学の教員の職務には教育、研究、学内業務など様々な役割があるが、かつて大学教員は研究者としての研究業績や論文数で評価されることが多く、教育については講義内容、使用教科書の選定など、教員の裁量のもとで比較的自由に教育が行われ、学内業務についての評価も昇格等の考課に対して割合を占めるものではなかった。

また、多くの大学では学生による授業評価を行っているが、授業内容も質・量についての経年的な変化については、授業評価だけで検討することが難しくなってきており、ティーチング・ポートフォリオを作成することで、教員自らが学生からの授業評価に加えて教育に対する取り組みや成果など教育活動全般について網羅的にまとめることができるメリットがある。

以上を踏まえ、専任教員として教員個別のティーチング・ポートフォリオを作成する。

2．教育の責任

九州ルーテル学院大学での私の教育の責任は、第一に、人文学科児童教育専攻における専門科目と共通教育科目の担当、及びこれらに関連して特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）の第一欄科目担当・教育実習担当教員としての役割である。

第二に、大学院人文学研究科障害心理学専攻の授業担当教員として、障害領域の支援に関する授業を担っている。

教育に付随する大学での職務としては、2020 年度から 2021 年度は副学長（学生支援・学生募集担当）、2022 年度から 2023 年度までは副学長（入試担当）として、新型コロナウイルス禍の対応を踏まえた学生の健康管理、休退学等の管理、障がい学生の授業等の支援、就職支援に関する統括・管理業務（2020 年度から 2021 年度）、学生募集全般に関する統括・管理業務（2020 年度から 2023 年度）を行い、2024 年度からは人文学科長として、人文学科の 3 つの専攻を取りまとめながら、教員の教育・研究及び学生支援に関する管理業務を担っている。

(1) 授業科目の担当

■　主要授業科目

【学部】特別支援教育論（幼）、特別支援教育論（小中高）、障害者教育総論、知的障害者の心理・生理・病理Ⅰ＜分担＞、知的障害者の心理・生理・病理Ⅱ＜分担＞、知的障害教育総論Ⅱ、特別支援学校教育実習Ⅰ（事前・事後指導）＜分担＞、特別支援学校教育実習Ⅱ＜分担＞、特別研究、卒業研究、フレッシュマンゼミⅠ＜2026 年度＞、フレッシュマンゼミⅡ＜2026 年度＞

【大学院】障害者支援学＜分担＞

■ 非常勤講師（2021 年度以降）

1．熊本学園大学社会福祉学部「臨床心理学」（～現在）

2．崇城大学教職課程「特別支援教育論」（2022 年度まで）

3．平成音楽大学音楽学部「特別支援教育論」（～現在）

4．熊本駅前看護リハビリテーション学院看護学科「カウンセリング論」（～現在）

5．熊本駅前看護リハビリテーション学院理学療法学科・作業療法学科・言語聴覚療法学科「臨床心理学」＜合同授業＞（2026 年度より）

■ 出張講義（2021 年度以降）

1．九州ルーテル学院大学ダウン症支援部秋期研修会講話（各年 11 月～現在）

2．ルーテル学院高等学校探究学習講義（2021 年 2 月、2023 年 9 月）

3．熊本学園大学付属高等学校探究学習講義（2024 年 11 月）

■ 認定講習（2021年度以降）

1．熊本県教育委員会教育職員免許法認定講習＜特支二免（知）＞（各年 8 月～現在）

(2) 教育組織運営

2020 年度から 2021 年度は副学長（学生支援・学生募集担当)、2022 年度から 2023 年度までは副学長（入試担当）として、新型コロナウイルスの対応を踏まえた学生の健康管理、休退学等の管理、障がいのある学生の授業等の支援、就職支援に関する統括・管理業務（2020 年度から 2021 年度)、学生募集全般に関する統括・管理業務（2020 年度から 2023 年度）を行った。

2024 年度からは人文学科長として、人文学科の 3 つの専攻を取りまとめながら、教員の教育・研究及び学生支援に関する管理業務を担っている。

3．教育の理念

開学以来、本学では少人数教育による手厚い指導と、机上での学修だけではなく様々な体験学修を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指しているが、自身を取り巻く人々が差し伸べてくれる厚意厚情によって、自身の成長が促され、困難や窮地に追い込まれた際の解消が可能となっていること等に感謝し、自身にもたらされた恩恵を心にとめて他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら体現できる人材を育成する教育に、一人一人の学生の 4 年間を通してあたることが本学の教育理念であると考える。

また、大学院教育にあっては、公認心理師養成大学院の特長に資するべく、大学院生自らが主体的かつ積極的に課題を追究し、その解決に向けて当事者や家族へのアプローチだけでなく、彼らを取り巻く人々が当事者に寄り添い支援の手を差し伸べるためのストラテジーにも目を向け、奉仕の精神を持ち視野を広げた支援の体現ができる人材を育成していくことが重要である。

（1）理念１：現実及び今日的課題をリアルに捉え課題を解決する力を育む

本学がキリスト教教育を基盤とし、隣人愛に根差した教育を根底に持つことを大切にしながら、私の専門領域である知的障がい児・者及び発達障がい児・者への特別支援教育、臨床発達心理学については、私が現在までの現場等での支援実践から得ている成果と課題について実際の現状をリアルに学生に提示することで、机上の空論とならない臨床力・実践力を身に付けられるようにする。

（2）理念２：当事者及び家族の心に寄り添い、当事者の強みを尊重した支援観を育む

当該児・者、保護者、きょうだいの心に丁寧と寄り添い、ストレングス・オリエンテッド・アプローチ（SOA）を最も大切にした支援が展開されることが肝要であり、ひいては教育者・支援者の課題解決の突破口となる。このことは、彼らから教育・支援をする側が解決の糸口を教えてもらっていることに他ならず、そのことに感謝して、学生自らが主体的かつ積極的に支援が展開できるよう人材育成に努める。

（3）理念３： 実践力・展開力のある高度なジェネラリストとしての力を育む

教育、保育、医療、保健福祉等の実践の場に立ち指導・支援にあたるには、様々な専門的手法を高度かつ適切に選択したアプローチを展開できる力が求められる。１つの手法の追究も重要ではあるが、本学での多様な学びを咀嚼し、多面的な実践や研究に取り組む人材育成に努める。

４．教育の方法

教育理念との関係では、以下の点を重視した教育方法を取っている。

（1）実際の学校現場等の取組と課題、保護者の障がい受容等の現状を率直に提示する

特別支援教育や児童発達支援の現場の事例は、テキストに掲載される模範的な事例ではなく、多様でシビアである。即ち、一般的な論理や支援スキルの提示だけでは、実践的対応力としての応用力が身に付かないことから、机上の空論となることのないよう、実際の学校現場等で行われている取組実践と組織的課題、当事者の保護者の障がい受容等について、シビアさも含めて提示するようにしている。

（2）授業内容が「1 冊のテキスト」となるようにする

学生に不要なテキストを購入させることなく、授業者の講義内容そのものが 1 冊のテキストとなるように、プレゼンテーションデータを組み立てて学生に提示する。

（3）授業からメモを取る習慣をつける

DX 機器や AI 技術の進展によって、手軽に情報の作成と収集が可能となったことは素晴らしいことであるが、現場での実践及び課題解決のために他者から示唆を得る場合には、得られる内容についてメモを取る姿勢が極めて重要となる。まずもって、日常の授業において本主旨を説明し、重要な内容を書き取るように促し、実習やボランティア等においても学生自らがメモを取るように促す。

５．教育改善のための努力

特に以下の点について、改善に努める必要があると考えている。

（1）改善努力１

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善するべき点は真摯に学生の声に耳を傾け改善するようにしている。

授業においては、分かりやすいとの声を多くいただいているものの、講義中にコメントを書き取る授業構成について一方通行的との批判や学生の負担の訴えもあることから、過度になりすぎないような配慮を行いたい。

（2）改善努力２

本学では、例年 FD 研修や学期ごとの授業参観の機会があり、これらは本学の他の教員の授業から授業の方法や展開の在り方を学ぶ絶好の機会となっており、今後も適切に参加し、自身の授業に反映するようにしたい。

（3）改善努力３

近年の DX 技術の進展に自らが対応できていないことが多く、授業中のアンケート・質問の回答の集約・開示や AI 等の活用の方法について、研鑽を積む必要がある。

6．教育の成果・評価

教育の成果としては、自身の理念に掲げる現場や当事者及び取り巻く人々の実際の現状を具体的に学生に伝えての授業が、学生の授業内容の理解に大きく反映されていることである。このことは、直近 3 年間の授業評価アンケートにおいて、学生から「わかりやすく理解しやすかった」との自由記述コメントを多数頂戴しており、客観的指標も総じて、授業内容の提示・解説の観点では高い評価を得ていると考えていることから、引き続き前進させていきたい。

７．今後の教育に関する課題と目標

私の目下の課題は、改善課題に示した DX 技術の活用である。新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点で導入されて以降、日常的に用いられている Moodle システムの円滑な利活用や、SNS と連携した活用、適切に AI を用いた資料の作成などにも可能な範囲で取り組みたい。

授業内容については、私自身の職務とのバランスが取りづらく、現場に足を運ぶ機会が減少していることで、最新の事例の提供が難しくなってきていることが課題となっており、自身のフィールドワークに基づく学生への還元が滞ることのないように努めていきたい。